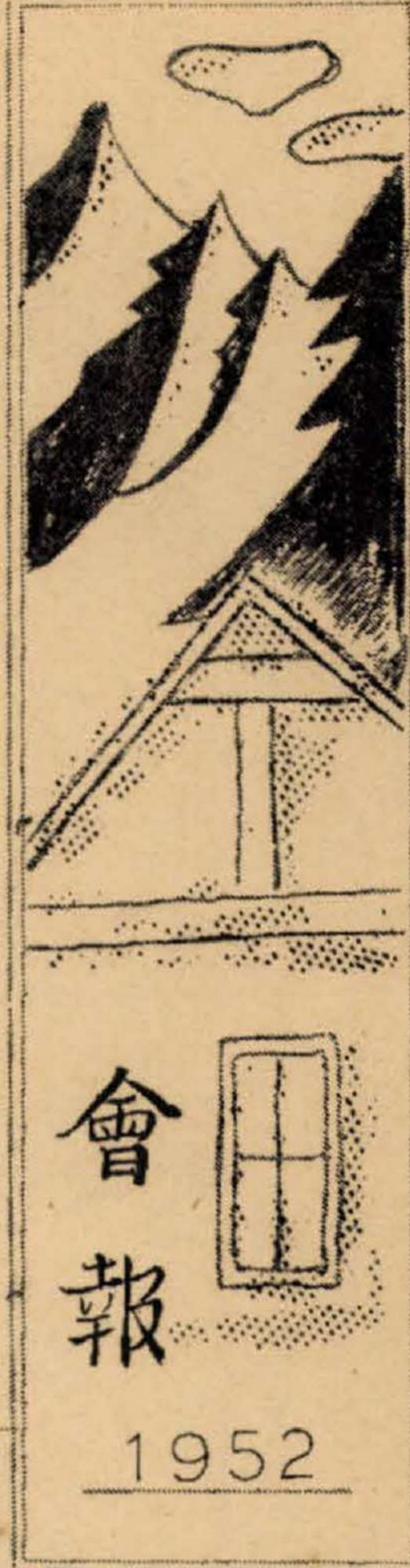


復刊のよろこび

中川孫

創立三十周年記念事業として



1952

旅、觀楓列車のポスターが駅の乗降口を美しく飾るようになつた。人々の意識は徐々に食糧、衣料からレクリエーションに向けられていつだ。青年男女のルツクサツク姿を駅頭に見かける日が多くなつた。

岳友からの便りはうれしい。とりわけ、山登りの便りはなつかしい。針葉樹会報は同好の友え、広く旦卒業年度を超えて、登山、旅行、集会その他数々のトビツタを伝える移動サロンのような役割を果してきた。今流行のマス・ユムユニケーションとも言えるだろう。

戰爭の進展に伴つて、紙の供給が次第に逼迫するに従ひ、同好のグループの発行する会誌の類は次々に発行停止の厄に会つたが、針葉樹会報も例外ではあり得なかつた。昭和十七年十月三十日第十九九号を最後として休刊のやむなきに至つた。草花の種や苗がデパートの園芸部や、街の花屋の店頭を飾るようになつたのは廿五年の春頃からであろう。家庭菜園は花壇に廻り、花便り、新緑の

旅、観楓列車のボスターが駅の乗降口を美しく飾るようになつた。人々の意識は徐々に食糧、衣料からレクリエーションに向かうにいつだ。青年男女のルツクサック姿を駅頭に見かける日が多くなつた。

針葉樹会も集会の数を重ねるようになつた。その或る日のこと、正しくいえば今年の六月十九日、一橋山岳部創立三十周年記念事業相談の席上で、テント、ザイル、といつた登山用具の整備と共に、「針葉樹会報を復刊したい」という叫びが、出席の会員からあがつたのは、期せずして、皆の心がそこには一致してゐた現はれという事であろう。

私はいつの間に三十年を経過したのかと、自分自身を顧みた。なみ居る学生達は私の子供のようないるのだ。しかし数々の山行記や岳友の便りは、自身を頼みた。会報の創刊ですらはや十年を経て今も専記憶にありありと残る。これが心の糧といふものであろうか。

筆とれば物書かると兼行法師はいう。会誌ありて友の便り聞かまほじともいえるだろう。衣、食足りて、書読みまんとするのは、智識人の鄉愁であるだろう。とまれ、会報は、その時をえて、復刊の日を迎えることとなつた。編集のスタッフもそろつてゐる。「原稿は集まるでしようか」という。「そ

んなことで編集がつとまるか。原稿催促の鬼になるのだ。昔の名編集長、M君、H君等々皆税務署より苛烈だつた。「経費は集まるでしようか」「いや、強引に集めるのだ。キット集まる。第一号を出せ。あとは銀座通りさ」というわけで、初秋、第一号が諸兄の机上を飾るだろう。復刊がうれしいのは私だけじやない。

山岳部を出た男の話 吉沢一郎

太平洋貿易の石井君から何度も催促されて悪い悪いと思いながら遂に忙しさにかまけて失礼していつも、私の原稿が未れば印刷屋に廻せる迄になつたら、私は是非何か書いてくれと最後通牒が来てしまつた。

何が出て来るか解らないが、免に角ペンを持つて原稿用紙に向つて見た。昭和三年と言へばもう禾年は廿五年になる。光陰矢の如しなんて言葉は若い(?)頃は馬鹿にしていたが、頭の毛が芸くなり老眼鏡をとつたり外したりするようになつた今日此頃になつてやつと眼が覚めたという次第。学生時代山ばかり登つていて商大の山岳部を出た許りに六人の大供子供を抱えて赤だにその日暮し、どこも山どころの騒ぎではありませんという態たらくでございます。

電通へ入れて貰つたお蔭で毎年七月二十日、前後には必ず富士山に登つてゐる。従走り口から登つて頂上→御殿場口、砂走りというコースを良く飽きもしないで繰返している。去年頂上の小屋で頭痛がして一晩中苦しんでしまつた。年のせいかもと思ふが矢張りトレインングの不足が原因らしい。こんなことでは走もダーリングまでも行けそうもない。会社では私が富士に登れないようになつたら首にするつもりでいるらしいからせいで、い身体に気をつけて富士山だけは死を堵しても登るつもりでいる。

大阪へ来てもうやがて二年に近いが、この両千代津富田駅から五分許りのところにあるが、二階の窓から北を眺めると北側の山々が南北から北東に運転しているのがよく見える。四季夫々に色々な感銘を与えてくれて、一番高いのは七〇〇米突ばかりの石堂ヶ岡、之は紅葉とアベックの心中で名高い箕面の奥にある山だ。それから右の方へ進つて行くと竜王山、阿武山へ之には汽車からもよく見える白い建物の京大の地震研究所がある。それから暫らく右へ行つて一度山波がカツンと落ちる、そこが大阪では割に有名な摂津耶馬継のあ

るところ、それからグント上つて一番高いところが懐しのポンポン山だ。大百何十米突だつたかな。こゝへは廿年位前に登つて、三省堂から出して貰つた本に書いてある山である。こつちへ来てから家族連れで二度も登つている。これから秋遊ヶ岳に続き、太閤道のある山でこの山脈は省線の高櫻駅の向うで平地にありてしまう。山崎の天王山はこの山の麓になつてゐるので見えない。

兔に角、私は眼の前にある山は一応登つておかないと氣の済まないタチなので家族連れで之等の山々は皆登つてしまつたが、この次は六甲か、比良や鈴鹿の方へ足を延して見たいと思つている。然し今のような忙しさでは逆も四日とか五日とかいう休みは気が引けるというより自分が困るのでそれもうない。従つて大きな山行は全く望みがないのである。

大峰の山上ヶ岳を吹雪に追はれて洞川に下り、小南峠を超えて吉野川の畔に出た予科二年の頃の思ひ出はいつまで経つても懐しい。大阪へ来てから春秋会というのが出来て、その会のある度に私でもと日本山岳会の理事とか幹事とかをしていたことのある西中尾のベテランを会員としている。藤木老、今西錦司、西田一雄、田中薰、水野祥太

が懐しのポンポン山だ。大百何十米突だつたかな。こゝへは廿年位前に登つて、三省堂から出して貰つた本に書いてある山である。こつちへ来てから家族連れで二度も登つている。これから秋遊ヶ岳に続いたる人々が集つて来る。西堀氏も大轍出席している。今度のヒマラヤ行についても色々と内輪話をしていっている。今は遠慮しておいた方が無事らしい。

ドクター伊藤と言えば、最近突然会社に私を訪ねて来てくれて、京大のヒマラヤ行きでアメリカのハウストンへK2やナンダ、デビーで有名な世界的の登山家に懇意したところ、返事の中にあなたのこと書いてあつたから持つて来たと、その手紙をわざわざ見せに立寄つてくれた。それに

は "I used to correspond with Mr. Ichiro Yashizawa before the war, but have lost track of him. Do you know his whereabouts?" となつていていた。私は懐しの余り早速手紙を書いて送つておいた。まだ返事は来ないがさぞびっくりすることだろうと思つてゐる。

今西、中尾、林の三登山家を送る壮行会を櫻橋の大毎の三階でやつた帰へりに今西、伊藤その他京都組と一緒に省線に乗つた訳だが、茨木駅を過ぎた頃、その中の一人が急に私のところへ来て名刺を出した。藤平正夫氏となつてゐる。「実は私

はあなたの登攀記録を見て東大谷に入つたものですが、
「さへ」という訳。昔の人は張り切つていましたね」とほめてくれた。私はあの時、目的の右俣にどうし
ても入ることが出来ず左俣から早月尾根にとりつき鉢に出たのであつたが、あの時、右俣の頭から下を見て「ヨリヤ逆も石がおつこちて登れる谷ではなさそうだ」と思った谷を案の定、落石に懽まされながらも遂に初登攀（夏季）に成功したそ時の隊長さんだつたらしい。

私も急に当時の丸田という憶病入夫や蟹の鉢といふ私のつけた名前が今でも右俣頂上の大岩についていることなどを思ひ出して、その勇士ともつと話して見たいとは思つたが富田駅が来たので惜しくも別れてしまつたのは残念であつた。

私のやつてゐる仕事はPRです、なんていつたって若い学生さん達にはわからぬかも知れないが、之はアメリカから輸入した *Dalhia Relations* の本は近頃では殆んどといつていゝ位見ていな。それでも山の本には未だに魅力があり、十合や大丸、松坂屋で古本市が開かれると山好き重役のお尻にくつづいて見に行つてゐる。大阪へ来たての時に松阪屋の地下で発見したのがクリッジ

の "The Alps in Nature & History" 之がたつた三百円、最近ではシ白頭山シあんな大きな本が百五十円。

英語の本では本屋に注文してやつと届いたのであるがH.W.テイルマンの "China to Central" というケンブリッジ大学版の本が手に入つた。之は例のシプロンが迪化（アーチ）へウルムチの領事をやつているのを機会にテイルマンが出掛け行つて試登したボクド、オラの二どが中心に書かれているので、高さは東峰が六、五一ニメ突、中央峰六、五〇一メ突、西峰が六、三九七メ突となつてゐるが、之等は夫々三十メ突の上下はあるかも知れないどなつてゐる。こんな山は皆さんは何処にあるかも知らないと思うが、東経九〇度を中心とし、北緯四五度の南側に東西に連亘する山脈で、ツンカリヤ盆地を中心にアルタイ山脈と伺いあつてゐる山である。東亞大陸諸國境域圖によると迪化の東に博克圖鄂拉山（四六八〇メ）と出でている。これについては前に多少調へであることもあるので、この次の号までに又何とか原稿に纏めて置く心算である。長々と説らないことを書いて来たが、まあ嘗つては山に登つた事のある男の泣きごと位のところとおぼしめし、読み過して下さればもつけの幸いである。

雜

感

近藤恒雄

約二ヶ月位前、商大山岳会員の名刺を出して面
会に来た学生があつた。山岳会備品の販賣を集めて
に来た事と思つて出された名刺を見て吃驚した。
奥野君の子供である。商大山岳会も早や次の時代
になつて、嘗ての紅顔の美少年化して白髪の老人
となり、息子が山へ登つてゐるんだからうだた感
慨無量と言ふ処である。而も上野駅で奥野君を北
海道へ送つた時、駅頭で誰かの顔を見てワツとば
かり泣いた赤ん坊がどうやら此の學生らしいので、
懐旧の感誠に深いものがある。

そんなに時代が變つてもまだに山が忘れられず、
村尾・五十嵐其の他の諸兄と時に出掛けんだけ
ら、不治の難病も此處遠来る恐しいものである。

處で小生の處の次男も近頃どうやら難病の遺伝
が出たのか、登山登山と言ひ出してこれは困つた
が子供犬は登らせ度くない。あつちこつちの山で
遭難の記事が新聞に出る度になんとか子供大は危
険な処に近寄らせ度くない。親の心とでも言ふの
か不思議である。

小生も会社が左前になつた時に大藏大臣をやら
されてひどい目に遭つた。正に人生に於ける遭難

である。すんでの処で沢山の人と共に難難する処
であつたが、どうやら命からがら下山と言つた形
である。そんな具合で山へ登る時も無かつた次
第であるが、それでも心掛け次第では時々はそこ
ら辺りを歩ける理であるから入岡は心掛か大事で
ある。

茲数年来、小生の頭髪もとみに芸くなつて、行
きつけの床屋に行つても「旦那はあきらめが肝心
ですしねんて情けない事を言はれる様になつてしまつたが、気持は依然として二拾数年前の青年の
気持である。矢張り雲の彼方に浮ぶ峯々を見れば
昔の感概がわいてくる、そして其の山へ登り度い
と思ふ。切なる気持である。

最近友人が歐洲へ出張した時、瑞西を通ると言
ふから、是非登つて来いと言つたらウンケフラウ
へ登つたそ�で其処の石をお土産に持つて来てく
れだ。之は有難いお土産である。日本中であの山
の石をもつてゐるのは小生大だらうと思つて目下
大切に保存して居るが、たわいもない話である。
こんな事でくだくだ書いて居てもきりがないが、
最近の小生の近況を織込んで一寸書かして貰ひま
した。小生の勤務先は三井新館四階へ扇番号は四

一五、電話日本橋六六一三)です。最近は割合に席に居りますから附近を通つたら寄つて下さい。

「のんきなはなし」

増山清太郎

一口に十年の空白という。しかし見方によれば良い時代だつたとも思う。この岡にもつと遊んでおくべきだつたと、今になつて後悔したい位である。平常ならは遊覧の俗物どもの為に、尠からず喫煙を殺がれる筈の場所が、この空白時代には、訪れる人もなくて、溢れる様な詩情を吾々に注いで訪れる場合が多かつた。そのうちの幾つかを憶出してみようか。

昭和十七年四月の末頃、下部温泉から玉無山を越して岳麓に出た。入穴の、芸暗い商人宿に一夜をすごして、翌日は麓の道を本栖に歩いた。この前こゝを歩こうと思つて来たことがあつたが、自動車に煙と埃を引戻され、ホウホウの態で退散した処なのだが、今日はまた何という静けさだ。富士櫻の咲く道をグラグラ歩いてくると、思ひ掛けない方向に白峯が現れたりして、美しくも樂しい半日の散歩であつた。

空襲もひどくなつた二十九年四月某日、勤めを休んで花見とシヤれた。行先は等々刀の九呂併。お堂に上つてみると櫻の幹は折からの春雨に煙つて

見えない。白い花のみ雨の中に搖れるともなく搖れていた風情は、實に去り難いものがあつた。その年の六月には、丙種合格の私まで赤紙の洗礼を受けて、伊勢の桑名から四日市の方に入つた員邊という處に二ヶ月余りを過したが、私にとつては東京以外の地に住んだ唯一の機会なので、記憶に残るもののが多かつた。

藤原岳から御在所岳に連る鈴鹿山脈の山々が、兵舎の窓から一目に見渡される。朝と夕方に山が紫色に見えるのは、京都を想はせる。御在所岳は四日市に生れた故中島オンチヤンのお国自慢に出た山で、なるほど、彼氏の言う通り形は秀坂で、峻に似ている。が、サテ何處から見た峻に似ているのか、どうしてもわからぬいでいたのが、八日十六日の朝に突然想出した。不帰岳からの峻に似てゐるのである。なるほど軍隊ボケというのはヒドいものだと自分乍らあきれてしまつた。背後の岡を越えて二里許り行くと、多度神社に出てる。この丘陵地帯は、浅間の麓に似ていた。見晴しのよい山の上に立つて、桑名から四日市方面を眺めると、碓氷峠の見晴台にいるような錯覚に襲はれた。岡ヶ原に通じる道は赤松林を切拓いた道で、鬱蒼としている。二里半行つた処に、中世紀を想はせる鄙びた町があつて阿下喜という。日

本が減びようとする瀬戸際に、ピーピーヒヤラヒヤラとお祭をやついた。

二十一年六月、出張の日程をゴマかして京都に遊ぶ。連れの男が金閣寺を見たことが無いというので、つきあう。この寺は、子供の時に来た時に、家内の小坊主の態度が小憎らしいので、感じを悪くして、それ以来はじめて訪れたのだが、今日は広い寺域に、会つた人間は切符壳の僧一人。金閣の三階で、弁当を食べた後持は、また格別であつた。

池を距て、堂を望んだ寂しさと、堂の上から若葉に萌える衣笠山を眺めた華かさと、よくマツチしてゐるのと、流石五百五十年の年代の政であろうか。

その年の十一月、西の東から敵傍あたりを歩く。慈師寺の本堂の階に腰を下して、東塔を見上げ乍ら、例によつて両手の手弁當を展げる。塔の下では近所の子供が二人、マリをついて遊んでいる。千二百年も前にこのような複雑な美くしさを造出した人達は、そもそもどんな生活を営んでいたのだろうか? 今は滅んだ西塔は、東塔と対象であつたろうか? 異形であつたろうかな? 想像の翼は拡がつて、二時間近くも慈師寺に迷ってしまった。唐招提寺は、激賞する人もあるが、私には平安朝の建物よりも天平や白鳳の方がシックリ来る。電車

車で敵傍に向うと左側に遠く耳無山か、この山特有の浅い緑色のはでな姿を見せる。この色も子供の時にはじめて眺めた時から眼底に残つてゐたのだが、今、再び来て見て見ると、子供の時の記憶に誤はなかつた。天地天皇が「香具山は敵傍を愛しと耳無と相争ひき」と歌つているのを見るに誤はなかつた。天地天皇が「香具山は敵傍を愛しと耳無と相争ひき」と歌つているのを見るに誤はなかつた。天地天皇が「香具山は敵傍を愛しと耳無と相争ひき」と歌つているのを見るに誤はなかつた。天地天皇が「香具山は敵傍を愛しと耳無は男性らしいが、私にはむしろ敵傍の黒い色が男性で、耳無の緑は女性にふさわしい様に思われる。

こんな風にして、戦時から戦後にかけてもせいせい小ママに出歩くように力めていた。実際に気持をチット変えてみると、箱根や伊吾保などのような平凡な観光地にさえ、詩情というものは流れているものだと知つたのはその収穫であつた。さて肝心の山の方は如何にというと、大部サボつていてる。戦後經濟的に苦しくなつた上に、一時健康を害したこともあり、恢復してからは非常に忙しいポストに置かれた等の事情で山には御無沙汰してしまつたが、昨年九月に鉢に出掛けた。昭和十八年に後立山を歩いて以来実に八年振りの山登りで、その間高尾山にも登らなかつたのである。案の定、体の調子は實に悪くて、地獄谷の温泉小屋から往復しようとしたら、單隊釣で遂にエンコしてしまつた。帰途は彌陀ヶ原を避けて奥大日岳

今年の正月に十勝岳へ登つた。丁度満十八年振りでした。その時の山日記を見ると一行は奥野大先輩、手塚、増山、十合、喜川で暮の三十日に小樽を出発して勝岳荘に泊り、正月三日に十勝岳に登り同日下山しますが、記憶には毎日雪降りでひどく寒く、密柑は勿論パンも凍つた位で喜川か

十勝岳 堀岡清

美しく、非常に明るい感じの気持のよい道であつたが、中大日から稱名への下りは、所謂険路といふものであろう。富士に着いた時の足の痛むことは、昭和二年に松木謙三氏に連れられて、はじめて白馬岳から黒部に抜けた時と同じであつた。
編集者に催促されてこの原稿を書いてゐるのは、八月二十四日夜半である。山も、もう静かになつたろう。そのうちに何處かえ出掛けた。木曾駒にはまだ登つたことが無いからこゝにしようか。この間、覚張君が見えて、赤谷から飯豊山に登る良い路が出来たけれど、案外俗化しないようですが、富士の御中道でも廻つてみようか、など、考えてゐる。

耳をやいて奥野大先輩に「犬が耳をなくしたら大変だね」とひやかされたのも此の時だつたと思ふ。今は亡き喜川については最近の若い人々にはこう言はれても何の事か分らぬと思ふので解説すれば、彼の別名はコリーであり、それはその数年前に神津牧場へ行つた時に、たしか十合へ違ふかも知れない)が命名したのだつたと思ふ。
兎に角寒さがひどくて帰つて来てからの針葉樹会例会でその話が出たら「卵を煮たら生卵になつた」(→中川)「今日は三す寒い」(→近藤)と言ふ様な名言を聞かされたものだつた。あ、言ふ様な気分の針葉樹会が如水会館の再開を期に再び出来たのだからあと何かアレばきっと出来ると思ふのだがそれとも皆が偉くなつたのでもう馬鹿話に時間をつけなくなつたかも知れない。
話はとんでもない方にそれましたが非常に寒かつたと言ふ記憶があるので、今年の同行者全部に十二分に冬の事を吹き込んで置いた所が案に相違して好天氣の故もあつたが、昨年の正月のニセコよりも数等腰く二日の三段山の降りなど手袋が必要の程だつたのには全く驚きました。天氣にめぐまれて一日の夜に小樽を出発、二日勝岳荘へ戻

第一號 刊復 報 會 樹 葉 針

在は中茶屋迄)へ入り午後は泥流へ、三日は十勝
本岳を中心に遊び、四日午前中は三段山を登り午
後下山、同日中に小樽帰着といふ全く無駄のない
日程で十八年前の悪天候を一辺にとり返した形で
した。雪は非常に少く、その為に大滑降は困難で
したが、熔岸の流れた瀧の中の紛雪の振り子レ
下りの三段山は全く素晴らしいものでした。十八年
経つても山はなんにも変つてません。変つたのは
吹上温泉がなくなりつた事(湯壺大残つて居る)勝
岳荘に番人が居ないのでひどく汚くなつた事(営
林署の小舎が管理して居る)だけでした。

昨年の正月はニセコ、今年は十勝岳、三年目の
来年は大雪山と言ふ同行者の計画だが僅か三日か
四日で大雪山はどうかと思ひますが、一在は計画
になつて居ります。

尚此の三月に国体が小樽にあつたので市内の天
狗山に回転コースが二本新設され、リフトも設備
されたのでスキーを乗じむには非常に都合よくな
りました。冬出張でもある方は是非御立ち寄の上滑
つて見て下さい。

一回人事部に出すことになつていて、内容には生年月日、本籍、家族等から始まつて性格、長所、短所、趣味、運動などといふ欄がある。性格、長所、短所などといふ欄は、仲々旨く書けないし、去年は何と書いたか一年も経てば忘れてしまう。去年とあまり違うのも具合が悪いし、こんなことを書かせないでもよいではないか等と思えて仲々筆が途まない。

然しうまく書ける。登山スキーや、園薬等々、として趣味運動の程度として凝る方か、凝らぬ方が書けと参考に記してある。余程反つてそういう表現の方が余程正確に意味がある。この欄には私は躊躇をあらわしそうな気がする。まさに凝る方と書く。考えてみると私の山登りなどまさに凝る方に属するものだつたと思う。終戦後焼け残つた山の写真を整理していく中で年間の学生生活中六分の一を山で圖したことになる。初めの予科一年と終りの本科三年のときは比較的少くなつていて、四年間の滞山時固は一年の四分の一乃至五分の一位になる。随分凝つた方だと思う。卒業後は、始めの年は立山から白馬へ抜けたり、その後は、始めて

凝る方凝らぬ方
大塚武

てからは、ニセコ、十勝岳、羊蹄山その他相當に精を出したが、終戦後はすつかり落ちぶれて漸く最近又スキーやを履き出した程度、それも一年に一回一晩か二晩泊りの温泉スキーリゾートまつていてる。山の方々思うように行けなくなると今度は鋒先を墓に転じて最近は尋らこの方に凝つてゐる。尤も暮は学生時分に死屋の下宿で隣の部屋にいた船本ベンチやんから教わり部屋でも相当にやつた、その後兵隊のときも隨分呑気な兵隊で支那の大工に不を制らせて滻支二年の間に墓盤を三、四面作つたし、相手があれば誰とでもウロを戦はせたから初年兵の半年を除いては殆んど空白期間になつていな。結局あはえてからもう十五年位こんな調子でやつているから暮に費した時間も山の方と好い勝負になるかも知れない。とも角この方も凝る方では人後に落ちない自信がある。

この両棋院から初段の免状をもらつたが、その中に「貴殿棋道執心、修行無懈怠」と書いてある。この言葉はまことに有難いような言葉である。終りの方も「猶以勉励上達之心掛可爲肝要看也」で結んである。免状の文句は皆こういうものらしいから暮の世界では執心懈怠無き凝り性の輩が随分多くいるらしい。

事情かくの如く山でも暮でも私は何でも大抵凝る方らしく、自分の親父のことを思ひ出しても思ひ当る節がありひとりで可笑しくなることがある。尤も上達の方は暮の方で行くとどんなに頑張つても三段止り位にしか思えないし、山の方もそんな感じがする。これだけの時間を外に有益に使つたらなどと思わぬことも匂いがどうもこんな風に、何かに凝つては過ぎて行くのが自分の行き方だろうと思つてゐる
（ニセ・セ・ミー）

在米会員便り

「森脇芳之君へ昨年暮より桑港滞在中により望月君定七月十五日付友記未信あり。
「久しく御無沙汰致しました。第一物産で紐育を行つて居る田中君がヒヨツクリ桑港へ再度参りました。私、日本より未だ入港と今日初めYezemite及び^{degenera national Park}ヘドライブし何年がぶりの上高地的気分にひたりました。田中君も数日前に見て行つた様子で期せずして合致した話は屏風岩の何倍と言ふ岩壁を部の連中が見たらう感激するだらうとの事でした。」

田中一雄君へ本年春以来第一物産より派遣されコロムビア大学留学中より石井宛絵葉書、

「七日十日付、「小生目下旅行中、スリービングバッゲを持てオカンして居る。今ヨセミテルに居る。」

米河が見える。丁度上高地と同じ景色、明日桑港へ出発森脇さんに会ふ。八月中旬紅葉へ帰りマウント、クッドに登る予定。」

七月三十日付「目下 Edith Glacier の下で此の手紙を書いて居ます。登り度い山ばかり、金と暇と道具と山仲間が無いので一人淋しくあきらめて居ます。皆と一緒に登つたらと口惜しく思つて居ます。では又、Canadian Rockiesにて。」

尚、正月に来た森脇氏の便りでは、レニヤの方へスキーに行き、来て居る連中が余り派手で、アメリカのスキーはブルジョワのものである事をさことり、落膽した、とありました。技術も、皆彼氏より巧かつたらしい。

× × × ×

会報復刊によせて

先日針葉樹会の幹事氏から今年は一橋山岳部の創立満三十周年だときかされ、一寸おどろいたことである。十五年の時は固違いなくまだ在学中で、その時安した鳥真を探し出してみると当時の先輩現役三十余名の元気な顔がならんでいるが、その

中で戦争以来亡くなつた反が九人も数えられるので二度おびういた、会員の中で戦死した人々をもれなく数え上げたら、予想外に多いであらう。戦争が終つてから二、三の熱心な会員の努力にも拘らず、針葉樹会の集りに旧い人達の顔が余り揃わないのは、いろいろな理由もあるが当然あらわれるべき面々がかけてしまつたことに大きな原因がある。私の前後二三年の親しかつた仲間でも、小柳、林、小谷部、鷹野、和田、森川、新羅、原等の諸君が亡くなつて、當時を語り合えなくなつたことは、寂しいきわみである。

前には針葉樹会の席上でよく山行の下相談が出たもので、先輩現役が一緒になつたり、先輩仲間だけで出掛けたことがあつた。先輩と現役とが知り合うためからも、こうした二とが一日も早く復活出来たらと思う。去年の秋何年ぶりかで奥多摩に行き、小河内の湯に一泊して三頭山へ登ろうとしたら、翌日は終日雨に降られたので、サヤロ峠から数馬へ抜けて山崎屋の廬辺で半日火にあたつて帰つてきた。数馬の古い草ぶき家のたゞづゝ、相俟つて思われぬよい印象を與えられた。今年の三月残雪深い川苔山の頂にたつた所も意外に入は少なかつたし、去年の二百十日に谷川岳へ行つ

た時も人は数えるばかりだった。だから近くの山でも季節とコレスのとり方ではまだまだ入気の少ない静かなお山がたのしめると思う。こんな小さなお山でもいゝ、少し長い旅ならなお更、昔の仲間と出かけられたらうれしい。

とつ赤石山脈南半のよう人の行かぬ処を、二三十年前の大輩がやつたように天幕をかついて歩きまわるのも面白いのではなかろうか。そして人のワンサと行く名所はシーブン外れに行く方が賢明のようだ。

今年の夏の上高地近辺は戦前にもなかつた人ゴ
ミで、島々へ下るバスなどは人の多い時は一日待
つても乗れない者が沢山出たそうで、あれぞ寧い
てはだのまれても到底行く気がしない。誰しも行
くコースは益々人がふえる反面一寸つむじ曲りの
山は、かへつて人がへつてゐるのだろう。上高地
へは戦後一度、二三年前に行つたが、七月の始め
だつたせいか人は余り多くなかつた。その時は西
穂高の守の山荘に一晩厄介になつて、鬼の内をつ
つき乍ら小谷部の思い出や昔の話に花がさいた。
現役諸君も人の出感るシーズンには、東北とか
上越とか赤石以南とかの人があまり行かない山をさ
がしていつたらどんなものだろう。今夏聖岳から
はつきりしていないうから、登山者も少なくあそら
く年に二三パーセン位しか通らないのではないか
と云つていた。山登りには色々な面があるのだから
ら、人ゴミの時を送んで穂高や鋸の木に集中
するばかりが山岳部の山登りでもなかろうし、ひ

PENちゃんなどは今年の春も立山へ行つたし
年をとつても一向に山から足が遠のかないのには
一寸あどろく。私自身も行きつけないとついあつ
くうにならから、なる可く一ト月に一度は小さな
山ひとと心掛けているが、余程いろんな條件に悪
まれないと実行がむづかしい。今年の一月野沢ス
キー行の時は北海道のARAさんも参加すると言
うのに、先約があつたので、私は霧ヶ峰を越えて
大門峠の近くにある三井の山寮へ行つて了つた。
この二三年めつたに出掛けないが、蓼科山塊の二
子池の静かさや、伯耆大山の紅葉の美しさは忘
れられない印象だつた。

こんなことを書いていと矢張り出かけたくな
つて仕様がない。現役時代に猛烈に登つても卒業
して暫らくすると、忘れたよう山から遠ざかつ
て了う幸運のにもいるのに、いゝ年をして今だに
山から足が洗えないのは洵になきけない次第なの
だが、私の周囲にもこうした人が案外多く、六十
七やの坂をこしても山のことになると目の色をか

えて夢中にならる同病君がいるのだから、別に心配もしていいが、とにかく昔の仲間と出かけてみたいと思うのは、私一人ではあるまい。

針葉樹會報が復刊されると聞くと、人一倍うれしい。どうか辛棒して続けていたがきたい。前は先輩の仲間入りをしたトタンに、会の会計か会報編集のどちらかを必ずやらされた。これがまあ尼介みたいなもので、ことわれないのが不文律だつた。昔のように諸事祭ではないから年四回位出せたら結構だし、これで会員の動靜がわかり、だんだん山へも出掛け仲間がふえれば、編集幹事の労もねぎらわると言うものであろう。(一九五二、八月)
(K A N P)

山岳部報告(七月)

(1)

潤沢合宿(七、二一七、二二一)
参加者、旧三、中村、渋谷、南、海老沢、河野
新四、西村、伊藤、渡辺、竹脇、新二、石原、
須山、勝田、奥野、白石、面木、鹿俣、新一、
福田、吉田、鈴木、南竹、松尾、佐藤
柳沢、栗屋、中村、春日井、佐藤
A・先発隊(渋谷他三名)
十一日出発、雪の多い潤沢に入り北穂高沢

次下に幕営せる処、十四日早朝睡眼中、落石に見舞はれ福田が大脛部に負傷、その石は天幕を突き抜け更に下の天幕の綱を切断、漸く止つた。

B. 本隊(甲村他二十三名)

一五日出発、福田の家族二名同行、十六日、横尾岩小舎前幕営、此の日甲村先輩同行、十七日、福田を租借て上高地に下し、部員二名附添ひ家族と共にハイヤーで松本へ送る。十八、十九と雨で動けず二十九日より行動。

第一日(二十九日)晴

○三峯フエスヘ渋谷、甲村、鹿俣○北尾根(西村他五名)○奥穂ジヤンダルムヘ伊藤他十三名)

第二日(三十日)快晴

○三峯フエスヘ吉利他一名○北穂側稜ヘ中村他六名○北尾根より北穂ヘ伊藤他六名○雁陣尾根(白川他二名)○潤沢槍

第三日(三十一日)快晴

○潤沢槍(鹿俣他数名)○北尾根(数名)○潤沢槍(鹿俣他数名)○北尾根(数名)

第四日(三十二日)晴、解散

○渋谷他(数名)五、六のコルより奥又へ、他是数名の帰京者を除き縦走へ。

(2)

捨・鳥帽子縫走

○二三日、中村他、總勢十七名模尾より槍沢を経て殺生附近に幕営、槍沢雪多し。

○三四日、快晴、双六の池を経て三俣蓮華へ。小倉附近に幕営。快適なり。此の日海老沢。

竹脇は燕を経て帰京

○二五日、快晴、鷲羽、三岳より鳥帽子へ。

○二六日、濁小舎より葛温泉へ。宿泊、最後のコムパ。

○二七日、大町を経て帰京。

追記

最初に負傷と云ふ思はぬトラブルがあつたが二十八名に及ぶ大人數で以後の合宿を無事終了、更に十五名が鳥帽子迄の縫走を行ひ得た事は永らく不若流だつた部活動の再出発として一應の成功であつたと思ふ。

然し、此の合宿を行ひ得た事は、天幕ザイル等の寄附、又合宿に対する種々のアドバイス等、物心両面に多大なる御援助を頼いた諸先輩の御蔭であり、茲に厚く御礼申上げる次第です。

尚、今合宿には、本隊出発より酒沢到着迄太田可夫教授が同行されました。

増山氏の御世話により、協和銀行日本橋支店、協和会館にて時折開催して居り、幹事へ伊藤善生、佐藤勇が担当)よりその都度各位に御連絡致して居ります。

一四

針葉樹會集合の現況

編集後記

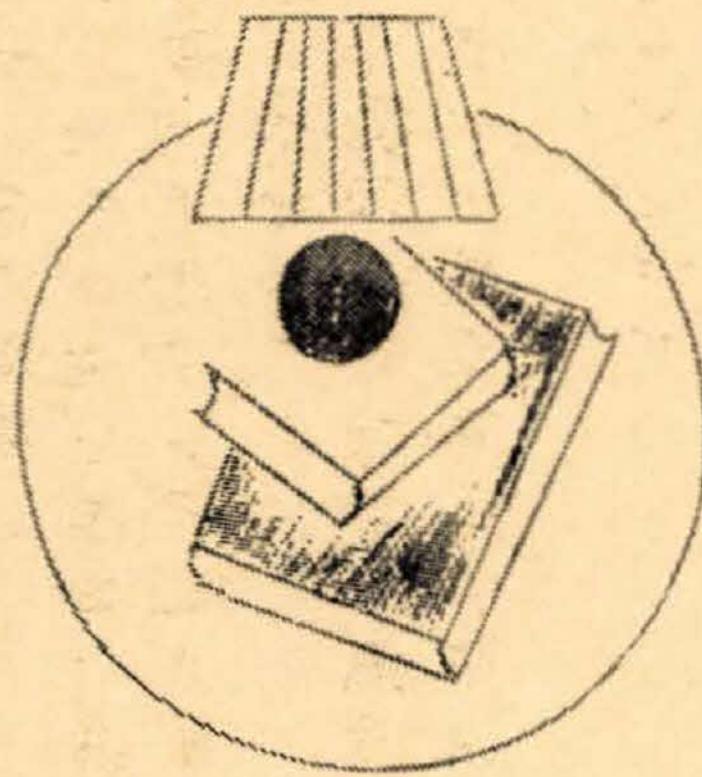
六月十九日の針葉樹會の席上「一橋山岳部創立三十周年に当り何か記念事業をやり度いレ」と言ふ話が出、その結果、時代も一応落着いたのだしあう会報を出してよい頃だから、此の機会に復刊しよう、と言ふ事になり、結局同じ会社に居て便利だからと言ふ理由で伊藤と石井とが復刊第一号の編輯の責に任ずる事となつた。

そして今日、編輯の粗漏はさて置きこゝに復刊第一号を御送り出来ることなりましたが、これが今後の踏切ともなり、昔の如き針葉樹會の機関となることを切に望んでゐる次第です。

處で編輯に着手以来ニヶ月余りを経て漸く出来上ると言ふスロモ一振りは、我々兩名が又年なる事に免じて御寛恕の程御願ひ申上げます。又復刊に際しては会員一同に予告して原稿を募るべき處、

経費の節約に名を籍りて委員の独断により寄稿者を送定した点は深く御詫び申上げますが、本号により会報復刊か会員各位に周知されこと故、次号より振つて御寄稿賜る様御願ひ申上げます。

尚、次号編輯委員は未だに付、針葉樹會幹事伊藤恙生（東京都千代田区丸ビルヒタセ区、太平洋貿易株式会社気付）宛、原稿並に各位の御消息をお寄せ下さい。（石井、伊藤）



針葉樹會報 復刊第一号

昭和二十七年九月一日印刷発行

編輯 石井左右平

伊藤恙生

印刷所 東京都中央区湊町一の九
株式會社 双文社

電話築地 (55) 三六六六番

150.
2700.-